

鵜飼という漁法

鵜飼(うかい)と言って思い浮かべるのは、岐阜県長良川(ながらがわ) 鵜飼だと思います。かがり火につられて集まってくるアユを、鵜舟に乗った鵜匠が何羽もの鵜をあやつり、捕まえる様は見事としか言いようがありません。

長良川鵜飼は宮内庁の御料鵜飼であり、皇室の保護のもとで行われています。鵜匠は宮内庁式部職鵜匠として国家公務員の身分をもち、鵜飼という伝統文化を後世に伝えていく仕事をしています。

長良川以外の地域でも鵜飼が行われています。おそらく鵜飼は、漁の一つの方法として、鵜のことをよく知っている人々によって全国に広まっていったと考えられます。例えば、現在、東京都と神奈川県の間を流れる多摩川では鵜飼は行われていませんが、以前は行われていました。江戸時代の浮世絵師・安藤広重の錦絵^{★14}には、多摩川の鵜飼が描かれています。このように、鵜飼は記録にあるだけでも全国150か所以上で行われていました。しかし、網漁の発達により、漁としての鵜飼は衰退していきました。

現在、鵜飼は全国12か所で行われていますが、漁としての鵜飼は御料鵜飼だけで、あとはすべて観光のための鵜飼です。

毎年、夏に笛吹川で行われている石和鵜飼も観光鵜飼の一つです。石和鵜飼は、鵜匠が舟に乗らずに歩きながら鵜を操る徒歩鵜(かちう)という珍しい漁法を用いています。

- ★13・・・式部職は、宮内庁の内部部局の一つ。
- ★14・・・錦絵(にしきゑ)は、浮世絵の多色刷りの木版画のこと。



◀長良川鵜飼



▶笛吹川の石和鵜飼
徒歩鵜(かちう)

鵜飼山遠妙寺と謡曲『鵜飼』

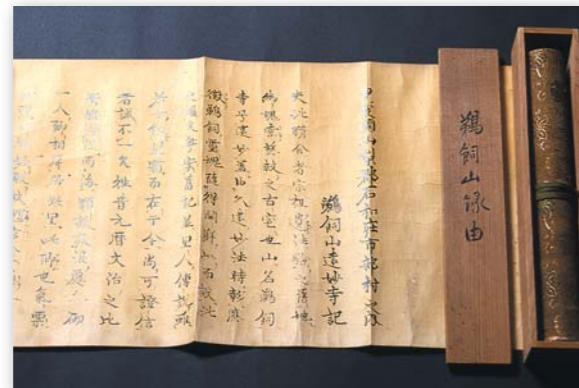
『鵜飼山遠妙寺(うかいざん おんみょうじ)縁起^{★15}』は、笛吹市石和町市部にある遠妙寺の成り立ちを伝えています。要約すると次のようになります。「文永11年(1274年)、日蓮上人は法華経を広めるために甲斐国を巡り歩き、その途中で石和に立ち寄りました。ここで、鵜使い(うづかい)の亡霊に会ったため、弟子に三日三夜にわたって法華経八巻の一字を石に書写させ川底に沈める川施餓鬼(かわせがき)供養^{★16}を行ったところ、鵜使いの亡霊は安らかに成仏することができました。その時に造った墓が遠妙寺の起源となっています。」

『鵜飼山遠妙寺縁起』に記されている「鵜飼漁翁亡霊濟度(うかいりょうおうぼううれいさいど)」の話は、すでに鎌倉時代末頃には関東一円に広まっていた。この話をもとに、世阿弥が能の台本である謡曲『鵜飼』に作り上げました。能『鵜飼』が完成したのは、今から600年ほど前の室町時代になります。

- ★15・・・鵜飼山遠妙寺縁起は、遠妙寺の起りを記したものだ。
- ★16・・・川施餓鬼供養は、水死者の霊をしずめるために川岸等で行う供養。
- ★17・・・鵜飼漁翁亡霊濟度は、日蓮上人が、石に経を書いて川底に沈める供養を行い、鵜使いの亡霊を救った話。



鵜飼山遠妙寺(うかいざんおんみょうじ)の山門



鵜飼山遠妙寺縁起(幕末 遠妙寺蔵)

鵜飼勅作

能や謡曲の演目としてよく知られている『鵜飼』は、江戸時代に入ると浄瑠璃や歌舞伎でも演じられるようになります。能や謡曲で「鵜飼漁翁(うかいりょうおう)」や「鵜使い」と呼んでいた人物は、浄瑠璃や歌舞伎では「鵜飼勅作(うかい かんさく)」という名前と呼ばれています。勅作の名前が初めて浄瑠璃に登場するのは、近松門左衛門の作品でした。こうしたことから、勅作の名付けの親は近松門左衛門ではないかと思われる。

- ★18・・・鵜飼勅作の話は、「親孝行の勅作が母の病気を治すために、殺生禁断の領内を流れる石和川(鵜飼川)で魚を獲ったため糞巻きの刑に処された。以来、亡霊となってさまよい村人を悩ませていた。日蓮上人が村に立ち寄った際に、弟子に経文を書かせた小石を川底に沈めて供養したところ安らかに成仏できた」という内容。



「日蓮聖人石和河にて鵜飼之迷魂を濟度志たまふ因」(写し絵)
(原作は、月岡芳年 身延山久遠寺蔵)



遠妙寺境内に建つ漁翁堂



▶笛吹川右岸に建てられた
鵜飼勅作翁の像

石和で行われていた鵜飼

ところで、なぜ石和で鵜飼が行われていたのでしょうか。平安時代後期に、甲斐国で唯一の御厨(みくりや)が石和に置かれていたことがわかっています。御厨は、神に奉納する魚を調達するための施設とその領地のことを言います。石和御厨の詳細な所在を示す資料は残っていませんが、現在の石和町窪中島の神明神社の近くにあったという説が有力です。

また、「鵜飼山遠妙寺縁起」には、鵜飼漁翁が殺生禁断の地である「観音寺境内を流れる石和川」で鵜を使って漁を行ったため、糞巻きの刑を受けたと記されています。

こうしたことから、神明神社や観音寺の近くを流れる鵜飼川は、アユ等の魚が獲れる格好の漁場であったと考えられます。そして、おそらくその漁法は、当時一般的で確実に魚を獲ることができる「鵜飼」であったと思われる。



▲薪能(たきぎのう)「鵜飼」の一場面
鵜飼飛祥の地、鵜飼山遠妙寺にて
(観世流能楽師 南條秀雄氏)
[重要無形文化財保持者]

鵜飼参考本 ▲



▶石和鵜飼が行われている笛吹川
(当時は石和川が流れていた)

遠妙寺の経石

遠妙寺に伝わる経石(きょういし)は、一字一石経(いちじいっせきょう)と言い、一つの石に経文を一字ずつ書いたものです。一字一石経は、鎌倉時代に始まり江戸時代に盛んになった風習で、病気を治したり、豊作を願ったり、靈魂を鎮めたりする目的で行われました。

遠妙寺の経石について記述する資料がいくつかあります。『和漢三才図会^{★19}』は、甲州の代表的な土産品を紹介していて、その一つに石和川経石が載っています。また、『甲州新編』、『甲斐国志』、『並山日記』^{★21}は、日蓮上人による「鵜飼漁翁亡霊濟度」の話とともに経石を紹介しています。

明治34年(1901年)に発行された『考古界』という雑誌に、山中笑の「経石に就きて」という論文が発表されています。その書き出しを要約すると、「全国各地で、小石に経文を一字ずつ書いたものが発見されました。これを経石と言います。もっとも有名な経石は、石和宿の遠妙寺に残っていて、日蓮上人が鵜使いの亡霊を成仏させたものです」という内容になります。遠妙寺の経石は、歴史上最も有名な経石と言えます。

- ★19・・・和漢三才図会は、江戸時代の図解入り百科事典。(正徳3年=1713年)
- ★20・・・甲州新編(こうしゅうばんし)は、山梨県の歴史資料。(享保17年=1732年)
- ★21・・・並山日記は、甲州道中や東海道の旅行記。(嘉永3年=1850年)



◀遠妙寺に伝わる七字の経石
(ガラス容器に入っている)



▶万年橋右岸にある
御硯水(おすすりみず)
(経石に文字を書くために硯の水を汲んだ井戸)



甲州道中石和宿と
いさわ鵜飼

笛吹川石和鵜飼保存会